

第12章 日本人は小野田元少尉をどう見たか

——フィリピンの残留日本兵をめぐる語り

永井 均

1 「小野田シヨック」

フィリピンは第二次世界大戦で日本軍の占領下に置かれ、国土が戦場となり、アジア・太平洋戦域において最大の激戦地となった。そのフィリピンで終戦後も投降をかたくなに拒み、ルバング島という名の小さな島のジャングルに潜伏し続けた日本軍人、それが小野田寛郎元陸軍少尉（一九三二年三月一九日―二〇一四年一月一六日）だ。一九七四年三月、小野田元少尉は、元上官からの「任務解除」命令を受けて投降し、日本に帰国した。日本航空

(JAL)の臨時便が羽田空港に降り立ち、タラップから背広姿の元少尉が姿を現わすと、出迎え客の歓声で空港は熱気に包まれた。新聞各社はトップ記事で紹介し、テレビ局も主要各局が特番を組んで、このニュースを伝えた。『週刊文春』（一九七四年四月八日号）が「小野田シヨック」と見出しに付けたように、元少尉の帰還は当時、日本国民に驚きをもって受け止められた。

小野田元少尉はそれから四〇年余り経った現在も日本人の関心を誘う（斎藤 2015、林 2016）。二〇一四年一月一六日に元少尉が死去した時、その訃報はすぐに内外のメディアで報じられた。直近の三年（二〇一六年七月―一八年八月）に限っても、確認できるだけで九本の元少尉の関連番組が制作されている。

小野田元少尉が日本人の「残留日本兵」イメージに今なお影響を与えていることは、二〇一八年六月、尾田栄一郎の人気漫画『ONE PIECE』（ワンピース）八九巻の表紙カバーに掲載された作者のコメントとイラストが物議を醸した一件からも窺い知ることができる。作者のコメントは、一九七二年一月下旬にグアムで発見され、二月に帰国した横井一元軍曹の名誉を傷つけるものではないか、として非難を浴びたのだが、そこに添えられたイラストは横井元軍曹というより、むしろ小野田元少尉を想起させるものであった。

それでは、小野田元少尉はどのようなプロセスで投降し、帰還の道歩んだのだろうか。戦後約三〇年を経て、南国のジャングルから「豊かな社会」日本に突如出現した、この元日本兵を当時の日本社会はどう迎えたのか。本稿では、まず小野田元少尉を中心とするフィリピンの残留日本兵の軌跡をたどり、次いで元少尉の帰国をめぐる日本国内の報道の一端を紹介し、その特徴と意味を考えてみたい。

なお、残留日本兵の定義について、本稿では、第二次世界大戦で日本が侵攻、占領したアジア・太平洋戦域で、終戦後、他の日本軍将兵等が引き揚げ、復員していく中、投降を拒み続けて日本に帰国せず、そのまま現地（外地）に残留し、その後、祖国に帰還するか、現地に留まった日本兵等（植民地出身者を含む）、とする。残留日本兵は、フランス領インドシナ（現在のベトナム、ラオス、カンボジア）やオランダ領東インド諸島（現インドネシア）をはじめ、タイ、ビルマ（現ミャンマー）、中国、マラヤ（現マレーシア、シンガポール）、フィリピン、ソ連（現ロシア）、モンゴルなどアジア各地に存在し、その総数は一人にも及ぶという（林 2013）。残留兵の中には、現地に同化（定着）した人と、同化しなかった人がいるが、本稿ではフィリピンを事例に、現地社会に同化しなかった元日本兵に絞って検討する。

2 小野田寛郎元少尉

小野田寛郎は一九二二年三月一九日に、父種次郎と母タマエの四男として和歌山県内海町で生まれた（以下、主に小野田1974、小野田1995、戸井2005参照）。幼い頃から強烈な負けず嫌いで自我が強く、しばしば親や教師に反抗し、衝突した。幼少期を地元で過ごし、海南内海尋常小学校と海南中学校で学んだ。小学生時代は写真が趣味で、中学に入学すると剣道に熱中し、その腕前はすぐに全国レベルに達した。中学卒業後、官立の高等商業学校に進学する道もあったが、親への反発もあり、「これからは自分で食べてゆく」、「中国に渡って商人になって、お金を儲けるんだ」と言って、地元の貿易会社の田島洋行に就職した。一九三九年五月、漢口（湖北省）支店勤務のために中国へ渡った。一七歳の時であった。現地での仕事は中国人相手だったため、中国語を猛烈に勉強し、ほどなく不自由なく話せるようになった。現地で車を乗りこなし、社交のために漢口のフランス租界にあるダンスホールに足繁く通い、青春を謳歌した。

満二〇歳になると召集令状が届く。一九四二年五月、漢口で徴兵検査を受けて「甲種合格」となり、一月一〇日、郷里・和歌山の歩兵第六一連隊に現役兵として入営した（以

下、軍歴については、厚生省援護局(1974参照)。一二月下旬、歩兵第二一八連隊に転属することになり、和歌山を出発して下関、釜山経由で再び中国大陸に渡った。翌年の一月一二日に南昌(江西省)に到着し、歩兵第二一八連隊の一員として抗日ゲリラの掃討作戦に従事した。

一九四三年七月、「昭和一八年度第一次幹部候補生」に採用、一〇月に甲種幹部候補生となり(十一月、伍長に昇進)、翌四四年一月二〇日に福岡県の久留米にある第一陸軍予備士官学校に入学した。予備士官学校を八月に卒業後、陸軍中野学校二俣分校に入学する。陸軍中野学校は、諜報や宣伝など秘密戦に関する教育や訓練を目的に設立された陸軍の教育機関である。一九四四年九月、遊撃戦(ゲリラ戦)の要員育成を目的として静岡県浜松市に「二俣分校」が新設された(畠山2003)。小野田は二俣分校の一期生であった。すでに語学や運転、写真など情報員に必要な技能を有しており、負けず嫌いで自立心が強いという彼の性質も中野学校に選抜された要因だったかもしれない。二俣分校では諜報や謀略などゲリラ戦遂行の基礎について短期間で学修した。戦況が悪化していたため、ゲリラ戦を指導できる要員を速成で育てなければならなかったからだ。同年一月三〇日に卒業すると、彼らは直ちに戦場に赴いた。

小野田は第一四方面軍司令部情報部附として、フィリピン行きを命じられた。一九四四

年一二月一四日に宇都宮南飛行場から空路で現地に向かい、一八日にクラーク（バンパンガ州）の飛行場に到着。そして一二月三〇日の夜、ルバング島に向かう。任務は「ルバング島において対海空の監視と敵情の報告、ならびに敵の上陸後における飛行場使用妨害（遊撃戦）」だった（厚生省援護局 1974）。一二月二一日未明にティリック港に上陸。直ちに配属先の臨時第二中隊の早川小隊に合流し、遊撃戦の指導に当たった。二二歳の彼は、こうしてルバング島での第一歩を印した。

一九四五年一月一〇日、彼は現役満期除隊となるも翌日付で陸軍少尉に昇進し、引き続き臨時召集されてルバング島に留まった。だが、ほどなく島に配備された日本軍（約三八〇名）は米軍の猛烈な攻撃に直面する。二月二八日、米軍がルバング島に上陸し、三月初旬には島全体を占領した。日本兵の多くが戦死する一方、残りの兵はジャングルに退き、抵抗を続けた。その後、八月一四日に日本政府がポツダム宣言を受諾し、九月二日に東京湾上の米戦艦ミズーリ号の甲板上で降伏文書が署名された。フィリピンでも、九月三日に第一四方面軍司令官の山下奉文大将が降伏文書に署名し、日本軍は米軍に対して正式に降伏した。かかる日本帝国の命運の岐路にあっても、ルバング島の密林には、なお降伏に背を向ける日本兵が潜んでいた。

3 ルバング島の残留日本兵

残留日本兵と投降勧告

終戦とともに、米軍はルバング島の日本兵に対して投降勧告を行った。当時、五五名の日本兵が降伏せず、ジャングルに身を潜めていた。一九四五年八月から九月にかけて九名が投降し、米軍の搜索隊に日本の投降兵も加わって投降勧告をした結果、翌四六年三月に三九名が投降した。その一方で、三月二二日に三名の日本兵が米軍との交戦で命を落とした（以下、厚生省援護局 1974）。

こうして終戦から一九四六年三月までに四八名が投降し、ルバング島に残された日本兵は小野田元少尉と島田庄一元伍長、小塚金七元一等兵、そして赤津勇一元一等兵の四名だけとなった。彼らはグループで行動をしていたが、一九四九年九月頃、赤津元一等兵がグループを離脱して姿を消し、その後、翌五〇年七月頃にフィリピン当局に投降した。一九五一年三月二八日、赤津元一等兵は、減刑された日本人戦犯らと一緒に日本に帰国した。赤津の証言でルバング島に三名の残留兵が生存していることが判明し、一九五二年初旬、日本の元軍人や日本人戦犯、新聞記者らが島に渡って投降勧告を行ったが、彼ら残留

兵の生存を確認することはできなかった。

両兵士の死亡公報

一九五四年五月七日のことである。ルバング島の残留日本兵三名は、島南部のゴンティンで訓練中のフィリピン軍特殊連隊（スカウト・レンジャー）と遭遇し、銃撃戦となった。小野田元少尉と小塚元一等兵は難を逃れて現場から立ち去るも、島田元伍長は射殺された。この事件はすぐにマニラの日本大使館に通報され、死亡者が島田元伍長であることが確認された。日本政府は小野田、小塚兩名の家族と厚生省事務官の三名を「説得隊」としてルバング島に派遣し、一九五四年五月下旬から約三週間、捜索を実施したが、彼らを探し出すことはできなかった（厚生省援護局 1974: *Daily Mirror*, 12 May, 18 June 1954; *The Manila Times*, 27 May 1954）。

その後もルバング島では、残留兵によると見られる人畜殺傷等の事件が散発した。一九五九年一月末には農民が銃撃に遭い、所有するカラバオも射殺、二月初めには建設作業員が射殺された。島民たちの訴えを受けて、フィリピン国家警察軍（PC）が武力による残留兵の討伐作戦に乗り出すとのニュースが報じられると、『朝日新聞』一九五九年一月三二日

付夕刊、二月四日付）、日本政府は事態を憂慮し、P Cに討伐の中止を要請するとともに、二月中に大使館員を現地に派遣して捜索に当たらせた。五月から日本政府派遣団による本格的な捜索活動が開始され、一〇月下旬には小野田、小塚両家の家族も捜索隊に加わり、フィリピン側の協力も得ながら捜索を実施した（『朝日新聞』一九五九年二月二七日付、五月一日付、一〇月二〇日付夕刊）。捜索活動は一九五九年五月から二〇〇日余り、計一四名により三度にわたって実施されたが、この時も小野田、小塚両名を発見することはできなかつた。元少尉らは密林各所に撒かれたビラの記載の誤りなどに疑念を抱き、「謀略にかからぬよう」用心して姿を現わさなかつたのである（厚生省援護局1974）。

かくして一二月二日、日本政府派遣団は二名が死亡したと判定し、捜索の終了を決定した。捜索を所管する厚生省は、小野田元少尉と小塚元一等兵が、島田元伍長が射殺された日の翌五月八日に死亡したと認定し、それぞれの家族に死亡公報を伝達、両家で葬儀も営まれた（『朝日新聞』一九五九年二月一二日付、『読売新聞』一九五九年二月一二日付夕刊）。他方、島民たちは両兵士の死亡をにわか信じ得ず、フィリピン当局も二人が死亡した証拠がないとの見解に立って、その後も独自に捜索を続けた。だが、結局発見に至らず、一九六〇年二月一〇日をもって捜索の打ち切りを宣言し、両名の死亡を認定した（『朝日新聞』一九六〇

年二月二日付、*The Manila Times*, 8 December 1959; *Daily Mirror*, 11 December 1959, 12 February 1960)。こうして、以後、公式にはルバング島に残留日本兵は存在しない、ということになった。

4 小野田元少尉の帰還

小塚元一等兵の射殺事件

しかし、その後もルバング島民は時折、残留日本兵と見られる者による攻撃を受けた。小野田元少尉らは依然として戦争が続いていると考え、島民が開墾などで生活範囲を広げていくと、それを自分たちの「領土」の侵害と捉えた。元少尉の証言によれば、ジャングルに身を潜めて生きていくために、姿を見られた時は「その人を殺した」。あくまでも「自己防衛のためだった」（厚生省援護局 1974）。元少尉らの攻撃によって死傷し、家を焼かれ、生活手段を略奪された島民は少なくなかった。フィリピン当局の発表によれば、残留日本兵の攻撃により、ルバング島民の三〇名が殺害され、一〇〇名が負傷したという（情報公開文書 2015a、『朝日新聞』、『読売新聞』一九七二年一〇月二日付）。残留日本兵と島民との間に人間的な交流はなく、両者は敵対関係にあったため（津田 1977）、島民にとって残留兵の存在は

恐怖の的であった。

一九七二年一〇月一九日の朝のことだ。小野田元少尉と小塚元一等兵は物資補給のためにテイリックからほど近い陸稲畑のある丘に足を忍ばせた。二人が稲刈りの作業をしていた農民に威嚇射撃をすると、農民たちは驚いて逃げ出した。自分たちの存在感を誇示するため、二人は農民が取り込み作業をしていた籾に藁をかぶせて放火した。二人がよく雨期明けに決行していた「狼煙作戦」だ。農民から通報を受けたPCは、二人の予想より早く現場に到着し、小野田、小塚両兵士との間で銃撃戦になった。その過程で小塚元一等兵が撃たれる。元一等兵は「胸をやられた。もうだめだ」と言って倒れ、ほどなく死亡し、小野田元少尉はからも逃走した（厚生省援護局 1974、小野田 1974、若一 1986）。

この情報はすぐにマニラの日本大使館に通報された。死亡したのが小塚元一等兵であることを確認した上で、大使館はフィリピン当局、および東京の外務本省と連携を図りながら、生存していると見られる小野田元少尉の捜索態勢を整えた。フィリピン側も、大統領府の指示でペドロ・ワッチョン中佐を中心に特別任務班「タスクフォース・オノダ」を結成し、元少尉の身柄の安全確保を期して捜索に乗り出した（*Philippines Daily Express*, 26 October, 4 November 1972）。

こうして一九七二年一〇月下旬から七三年四月中旬まで、日比合同の三度にわたる搜索が展開される。小塚元一等兵の死後、小野田元少尉の「救出」を求める日本の世論が急速に高まり、搜索活動はあたかも「国家的使命」であるかのような様相さえ見せた（若一1986）。一〇月下旬から第一次搜索が開始され、十一月下旬まで実施された。しかし、元少尉を発見できぬまま、第一次派遣団は一月末に帰国する。一月下旬より第二次搜索に着手、翌一九七三年二月初旬まで続けられた。さらに二月初旬に第三次搜索が始まるも、結局元少尉に関する手がかりは得られず、小野田家の意向も踏まえて、搜索は四月に打ち切られた。以上三度にわたる大規模な搜索は半年にも及び、この間、日本政府は元少尉の家族を含む約一〇〇名を現地に派遣した。むろん元少尉自身は一連の搜索を察知していたが、「この搜索には裏がある」と疑い、「まだ戦争は終わってはいない」と考えて、警戒を緩めなかった（厚生省援護局1974）。彼には、軍人として命を受けてこの島に派遣されてきたのだから、上官の命令がない限り絶対投降できないという強い信念があり（『毎日新聞』一九七四年三月一日付夕刊）、また小塚元一等兵が殺されたことに対する激しい怒りや搜索方法への不満もあって、その心は一層かたくなになった（小野田1974、小野田1988、戸井1995）。

小野田元少尉の投降

一九七三年四月に日本の政府派遣団が帰国すると、島は再び静けさを取り戻した。小塚元一等兵を失ったことで、小野田元少尉はルバング島で初めて一人で生きていくことになった。元少尉は、日比両国の関係者による搜索をつぶさに観察し、日本の搜索隊が残っていた新聞等を熟読し、小塚元一等兵の遺体がフィリピン側により丁寧に扱われ、「日比親善」「日比友好」の文字が記されていたのを見て、「謀略宣伝」の疑念を抱きつつも、もしかすると戦争は終わったのかもしれない、と感じるようになった（以下の叙述は、主に厚生省援護局 1974、小野田 1974、鈴木 1974、小野田 1988、戸井 1995）。

一人残され、心に迷いが生じ始めた頃、小野田元少尉は島の東部ブロール付近、通称「ワカヤマ・ポイント」で野営していた青年冒険家・鈴木紀夫の姿を目撃する。一九七四年二月一六日のことだ。鈴木青年は元少尉を探そうと二月九日にルバング島に渡り、一六日からアツガワヤン川上流のワカヤマ・ポイントで野営を始めていた。小野田元少尉はその日より鈴木青年を遠くから観察した。あるいはフィリピン空軍の兵士かもしれないと疑い、その素性を探るべく、いわば情報収集の一環として銃を構えたまま、青年に接近する。場合によっては射殺も辞さないつもりだった。二月二〇日、水曜日の日没前のことである。

在フィリピン日本国大使館の卜部敏男大使（当時）が元少尉本人から聞いたところでは、鈴木青年の前に姿を現わした時、元少尉は次のような心境だったという。

日本人が1人で野宿していても現地人が黙って見ているものなら、戦争は終わったのは9分9厘確実だと思い、そしてまた、あとの1厘は、これは自分が賭けて出ねばならない、もしこの賭けに失敗したときは、自分の不明のいたすところと諦めるほかない。（情報公開文書 2015b、永井 2017）。

突然目の前に現われた小野田元少尉の姿に鈴木青年は驚きを隠せなかった。銃を構える元少尉の前に、自分は日本人だと必死に訴えた。鈴木青年は生来の快活さと度胸で元少尉と夜を徹して話し、二人は少しずつ打ち解けていった。恐らく、相性がよかったのだろう。「小野田さん、写真を撮らせてください」という青年の言葉に元少尉は撮影を許し、上官による作戦任務の解除命令を条件に投降の意向を示した。翌二月二一日の朝、鈴木青年が元少尉に対して「上官の命令があれば降りてきてくれますね」と別れの言葉をかけると、元少尉は「いつでも出てやる」と応じた。その後、青年から小野田元少尉と遭遇したとの通

報を受け、日本政府は元上官の谷口義美元少佐をフィリピンに急派した。

谷口元少佐と鈴木青年は三月四日にルバング島に渡り、翌朝「ワカヤマ・ポイント」に赴いてテントを張り、野営をして元少尉が姿を見せる時を待った。九日の夕方、元少尉は、山中に残されていた鈴木青年のメッセージと谷口元少佐による命令書を確認した上で、テントに近づき、ついに二人の前に姿を現わす。その後、元少尉は谷口元少佐による任務解除命令の口達を受けて投降した。三人は翌日の早朝まで語り明かした。

三月一〇日の正午前、元少尉の実兄の敏郎医師と柏井秋久派遣団長がテントにいる三人と合流し、感動の対面を果たした。数時間後、夕方になる前に小野田元少尉らは島内の空軍レーダー基地に移動し始めたが、元少尉は途中、軍刀を隠してあった場所に取りに行つたために遅くなり、基地に着いたのは夜の九時過ぎになった。基地に到着後、元少尉はフィリピン軍将兵が整列する「投降式場」に歩を進め、儀仗兵の前に立つホセ・ランカード空軍司令官の前に出て、日本軍人の象徴の軍刀を渡して敬礼した。ランカード司令官はいったん軍刀を受け取り、元少尉の「敢闘を軍人の亀鑑であると賞讃」し、「比国軍総司令官であるマルコス大統領の名においてこの軍刀をお返しする」と述べて軍刀を元少尉に返し、この「投降の儀式」を終えた（情報公開文書 2015b、小野田 1988）。レーダー基地では投降式

後、直ちに記者会見が開かれ、元少尉の口から初めて自身の考えや思いが語られた。その様子は日比両国のメディアによって一斉に報じられた（『朝日新聞』、『毎日新聞』一九七四年三月一日付夕刊、*Philippines Daily Express*, 12 March 1974）。

翌三月一日、小野田元少尉はフィリピン空軍のヘリコプターでルバング島からマニラに移送され、マラカニアン宮殿（大統領府）でフェルディナンド・マルコス大統領と面会する。大統領は「天皇と国家のために戦った日本軍人の至高の象徴だ」と、勇敢な兵士の鑑として元少尉を称え、戦中・戦後に犯した違法行為について元少尉に恩赦を与えて日本への帰国を許した（*The Times Journal*, 12 March 1974）。その翌日、小野田元少尉は三〇年ぶりに祖国の土を踏んだ。元少尉、五一歳の時であった。

5 小野田元少尉帰還の語り

主要紙の報道と論調

一九七四年三月一二日の夕方、小野田元少尉を乗せた日航機が羽田空港に着陸する。飛行機のタラップに立った時、彼は出迎えの多さとその歓迎ぶりに驚いたはずだ。この時、空港ではおよそ七〇〇〇人が元少尉を出迎えた（『読売新聞』一九七四年三月一三日付）。

それでは、日本の国民は小野田元少尉の帰還をどう受け止めたのだろうか。元少尉の投降劇を現地取材したある新聞記者は、元少尉の帰国が「すべての日本人に強烈かつ異様な衝撃を与えた」と感じていた。この記者は、日本人のかかる反応について、「めまぐるしく変転してきた戦後の『物理的時間』に、まさに対極的に対置して現出された小野田さん独自のゆるぎない『主体的時間』への驚異」と捉えている（『時事解説』一九七四年三月二三日号）。小野田元少尉は（小塚元一等兵と異なり）情報将校という高い階級にあり、また眼光鋭く戦闘服姿という日本軍人そのものの風貌で突如出現した。彼の階級と劇的な登場の仕方が日本国民に強い衝撃を与えたのであろう（Treatalt 2003）。

日本国民の驚きと関心に応えるべく、メディアも総力を挙げて関連ニュースを報道した。テレビの主要各局は特別番組を編成して小野田元少尉の帰国を伝え（東京のテレビ各局は午後四時頃から一斉に元少尉の帰国を速報）、NHKの特番の視聴率は四五・四％という驚異的な数字を記録した。新聞各紙も競うように一連の出来事を事細かく報じ、例えば主要三紙である朝日新聞と読売新聞、そして毎日新聞（当時の発行部数順）の各紙の全頁数に占める関連記事の掲載頁の割合は、三月一日付の朝刊が二三・三五％、同日付夕刊四二・七〇％、一二日付朝刊が二〇・三〇％、同日付夕刊二五・六三％、一三日付朝刊が二五・三五％、そし

て同日付夕刊が一七—三八%だった（いずれも東京本社版）。

これら主要三紙の社説の論調は次のようである。

『朝日新聞』は、三月一二日の社説「三十年と四時間」で、東京・マニラ間は空路でわずか四時間であるのに、小野田元少尉はなぜ祖国への帰還に三〇年もかかったのだろうかと問い、「『大日本帝国』の軍人としては命じられた任務を途中で放棄することはできなかつた」と、日本軍隊の呪縛が要因の一つだと指摘した。同社説は「人間の生命力のたくましさにいまさらながら舌をまく」と、元少尉の「生命力」に敬意を払うとともに、彼を「国民の思想、行動の自由を奪い、みずから破滅の道を歩んだ国の生んだ、犠牲者」と捉えて、「小野田元少尉は、いつか来た道への警鐘を鳴らす使者としてうけとめられねばなるまい」と結んだ。

他方、『読売新聞』の三月一日の社説「小野田さんの無事救出に思う」は、元少尉の三〇年に及ぶ潜伏理由が「軍隊における命令の重みであったとすれば、これほど残酷なことではない」としながらも、その生還を「軍人精神」の賜物と捉える見方には批判的だ。むしろ、「小野田さんを支えてきたものは、彼自身に備わった強じんな精神力」であり、「環境の変化に対応しながら」生き抜いた元少尉個人の人間性、資質こそ重視すべきだ、と論

じた。そして、結論として、「戦場に眠る多くの戦没者とその家族、多くの犠牲者のことを考えても、いたずらに軍人精神を声高に語ることがあやまりであることを知らなくてはならない」、「社会の人たちが小野田さんをそっと見守る思いやりを持つことと同時に、戦争の傷跡の重みを静かに思う気持ちが必要ではないだろうか」と主張した。

『毎日新聞』の社説（三月二日）の表題は「小野田さん帰還の現代的な意味」である。「われわれは、小野田さんを英雄視するつもりはさらさらないが、極限の生活の中で示された立派な人生の生き方」を高く評価し、それと同時に、元少尉の帰還を戦後日本が失ったものを照らし出す鏡であると意味づけた。「『残置課者』という命令で敗戦後からはじまった小野田さんのルバング島での戦争は、自分との闘い」であった。与えられた課者の任務の遂行は、事実上、不可能なことであった。それを承知しながら、あえて任務にあたった。「命令を忠実に守ったがんこさは、古武士の一徹さを思わせる」。不可能なことにも「自分の最善、最高の努力をつくす」元少尉の生き方、「国や社会のために、肉親の愛情に溺れることをひかえさず、さむらいの心」は、人生にとって大切なものである」と評価した上で、「戦後の日本人がどこかへ置き忘れたものをあらためて、いま、小野田さんが問うているといつてよい」と結論づけている。

以上のように、主要紙の社説の論調は、小野田元少尉を戦争の「英雄」と見ることに抑制的で、むしろ「犠牲者」と位置づける傾向にあった。元少尉の英雄視が戦争美化につながることに警戒感もあったかもしれない (Trefalt 2003)。他方で、三紙ともフィリピンに触れてはいるものの、搜索活動に対する官民の協力など「好意的」対応への謝意など、あくまでも副次的なものにとどまっていた。

『中国新聞』の投書を読む

社説が新聞社の主張や公式見解だとすれば、投書には読者個人の思いや考えが比較的によく表われている。ここでは、具体例として中国地方、特に広島的主要紙『中国新聞』（本社・広島市）に掲載された投書を取り上げてみよう。ちなみに、同紙の社説「小野田さん救出の意味」（一九七四年三月一二日付）は、「言うまでもなく、小野田さんは戦争の大きな犠牲者である」とした上で、「われわれは小野田さんの救出を率直に喜ぶとともに、戦争の惨禍を改めて思い起こして二度とこのようなことを繰り返さないよう固く誓うべきだ」と、元少尉の経歴を反戦の糧にすべきだと訴えた。

『中国新聞』の投書は朝刊五頁の「広場」欄に掲載されている。小野田元少尉の帰国当日

(三月一二日)から報道熱が落ち着く同月二二日までの一〇日分を例にとると、当該期に掲載された投書は一八点を数え、その内容は大きく四つに分けることができる。

第一に指摘できるのは、小野田元少尉に対する尊敬の念だ。例えば、一八歳の男性は、元少尉の「強い意志と精神力に感心せずにはいられません」とし、ルバング島に留まり、戦い続けた理由について、「島から出ようと思えば、いつでも出られたでしょうが、上官の命令とそれにも増して愛国心がそうさせたのだと思います」と推測、「彼は日本人の誇りです」と書いた(三月二二日付)。第二に、元少尉を戦争の「犠牲者」と見る人も多かった。四七歳の女性は、「小野田さんの青春を無残に空費させた戦争、厳しい軍人精神は、当時を振り返ってゾッとします」と記し(三月一八日付)、三三歳の女性は、「小野田さんは、間違った時代に向かって間違った教育を徹底させていた日本の教育の犠牲者」と捉えている(三月一四日付)。第三に、「忠節」や「質素」など元少尉のふるまいから人々が看取した価値観が、戦後の日本で失われてしまったとして、元少尉を「戦後」批判の参照軸にする者もいた。五一歳の男性は、「極限を生き抜き、三十年間戦う姿勢を崩さなかった男、そこには忠節、礼儀、信義、質素といった旧帝国陸軍の背骨が凝縮している。戦後三十年近く日本人が失っていたものを小野田さんは満身にあふれさせているのではないか。われわれが失い

小野田さんが持っているものを取り戻す必要がある」と主張し（三月二日付）、また一八歳の男性は、「今の日本は墮落しきっています」、日本は経済的に豊かになったが、「日本人の心というものは全く汚れてしまっています」、「日本人は今こそ古来の純粋な精神を取り戻すべきではないでしょうか」と論じている（三月二日付）。

第四に、投書にはフィリピンへの言及もあつた。搜索活動について、フィリピンの「官民一致の積極的な協力を得たことに頭の下がる思い」を抱いて感謝し（六五歳男性の投書、三月二日付）、特にマルコス大統領が小野田元少尉に恩赦を与え、戦中・戦後の違法行為に報復せず、「寛大」な温情を示したことへの謝意が表明された（同前、および六〇歳男性の投書、三月一四日付、六〇歳男性の投書、同月二日付）。読者の中には、「小野田さんも生きんがため身辺の危険があつたでしょうが、半面、島民は三十年もの長期間、不安とおののきに襲われていたと思います」と、ルバング島民にまなざしを向ける読者もいた（六五歳男性の投書、三月二日付）。ただ、このような島民への言及は極めて少なく、投書の多くは概して元少尉に敬意を払い、彼を賞賛し、いたわるといふ、いわば日本人本位の傾向が強いものであつた。

6 帰還の語りの意味

これまで検討した小野田元少尉をめぐる日本国内の語りには、どのような特徴が認められるだろうか。前述のように、日本の各種メディアは、元少尉の投降と生還という数奇な運命にフォーカスを当てたが、その報道ぶりから、いくつかの傾向が読み取れる。

何よりも、戦後約三〇年もジャングルに潜伏した末に投降し、帰還したことに対する驚きと敬意、賞賛、そして長年の苦労へのねぎらいが支配的だ。また、元少尉を戦争や軍隊、当時の軍事教育の「犠牲者」として捉える人も多かった。さらに、元少尉の存在を「戦後」評価の座標軸とする見方もあった。

その一方で、フィリピンへの言及は少ない。マルコス大統領をはじめ、元少尉の搜索活動に対するフィリピン側の協力ぶりへの謝意が一部表明されるものの、現地の当事者であるルバング島民への語りはほとんど見当たらない。「小野田さんも戦争の犠牲者ですが、ルバング島の人たちも肉親を殺されたり、物をとられたりしているわけです。そういうことに対するマスコミの取り上げ方がすくなくいですね」——作家・陳舜臣の発言（『週刊文春』一九七四年四月八日号）は、当時の日本人の語りの状況をよく言い当てている。

このような小野田元少尉の帰還の語りは、日本人の戦争観の投影でもあっただろう。戦争中、一般の日本国民は空襲を受け、食糧難や疎開を強いられた悲哀を味わっており、戦地に送られた日本軍兵士も多くが戦（病）死や戦傷するなど苛烈で悲惨な体験をしていた（吉田 2018）。そのため、日本人の戦争の見方も、いきおい被害者体験に寄りかかりがちであった（吉田 1995）。小野田元少尉をめぐる日本の国内報道も、元少尉は「戦時の国家機構の被害者だった」という言説が多く、（元少尉自身も語っていた）その加害的な側面については封印された（五十嵐 2012）。いわば自国本位の文脈から紡がれる小野田元少尉の物語には、残留日本兵に恐怖と脅威を感じていたルバング島民の視点は除外されていたのである（Trefalt 2003）。加えて、マルコス大統領が独断で小野田元少尉に恩赦を与え、帰国を許したために、ルバング島民（特に被害者）は沈黙を強いられ、彼らの声も日本に届きにくかった。こうしたフィリピン側の事情もまた、日本の「帰還の語り」を下支えしていたものと思われる。

二〇一九年三月、小野田元少尉が投降し、日本に帰還してから四五五年の歳月が流れた。ルバング島民は今も小野田元少尉のことをよく覚えていいる。島の学校の生徒たちは、郷土史の一コマとして元少尉について学んでいるし、元少尉の投降後に親から付けられた「オ

ノダ」の名前を大切にしている人もいる（永井 2018）。島には「オノダ・トレール」という、洞窟に続く登山道が整備され、島の観光資源になっており、小塚元一等兵の名にちなむ「コヅカ・ヒル（別名ジャパニーズ・ヒル）」には福田赳夫元首相の揮毫による比日友好の碑が建てられ、時折、日本人旅行者などが訪れる。では、小野田元少尉ら残留日本兵のことをルバング島民などフィリピン人はどう見ていたのだろうか。実のところ、日本では、こうした角度からの見方はほとんど知られていない。残留日本兵をめぐる経歴史は、日比双方の体験や見方を交えることによって初めて、その歴史における立体像を現わすのであろう。

〔付記〕 本稿は、二〇一八年一月九日に開催された広島市立大学広島平和研究所主催「連続市民講座」での報告をもとに、新たな資料と知見を加えて成稿したもので、広島平和研究所のプロジェクト研究「『戦後』の史的再考―戦争から平和への移行期研究」（二〇一七―一八年度）の成果の一部である。

《参考文献》

五十嵐恵邦（二〇一二）『敗戦と戦後のあいだで―遅れて帰りし者たち』筑摩選書

小野田寛郎（一九七四）『わがルバン島の30年戦争』講談社

小野田寛郎（一九八八）『わが回想のルバング島―情報将校の遅すぎた帰還』朝日新聞社

小野田寛郎（一九九五）『たった一人の30年戦争』東京新聞出版局

厚生省援護局（一九七四）『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』未公刊

斎藤充功（二〇一五）『小野田寛郎は29年間、ルバング島で何をしてたのか』学研パブリッシング

情報公開文書（二〇一五a）『邦人援護事務 フィリピン・ルバング島元日本兵関係』作成（取得）時期一九七二

年一〇月八日、未公刊

情報公開文書（二〇一五b）『邦人援護事務 フィリピン・ルバング島元日本兵関係』作成（取得）時期一九七六

年一〇月六日、未公刊

鈴木紀夫（一九七四）『大放浪―小野田少尉発見の旅』文藝春秋

津田信（一九七七）『幻想の英雄―小野田少尉との三カ月』図書出版社

戸井十月（二〇〇五）『小野田寛郎の終わらない戦い』新潮社

永井均（二〇一七）『ルバング島の小野田少尉―在フィリピン日本大使の手記を読む』『HIROSHIMA RESEARCH

NEWS』第一九卷第二号

永井均（二〇一八）『カラバオと緑の楽園―小野田元少尉とフィリピン・ルバング島』『青淵』第八三三三号

畠山清行（二〇〇三）『秘録陸軍中野学校』新潮文庫

林英一（二〇一七）『残留日本兵―アジアに生きた一万人の戦後』中公新書

林英一（二〇一六）『小野田寛郎と横井庄一―豊かな社会に出現した日本兵』杉田敦編『ひとびとの精神史―日

本列島改造 1970年代』第六卷、岩波書店

吉田裕（一九九五）『日本人の戦争観―戦後史のなかの変容』岩波書店

吉田裕（二〇一八）『日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実』中公新書

若一光司（一九八六）『最後の戦死者 陸軍一等兵・小塚金七』河出書房新社

Trefalt, Beatrice (2003), *Japanese Army Stragglers and Memories of the War in Japan, 1950-1975*, London and New York: Routledge Curzon